

若山牧水中村憲吉
島木赤彦木下利玄
集



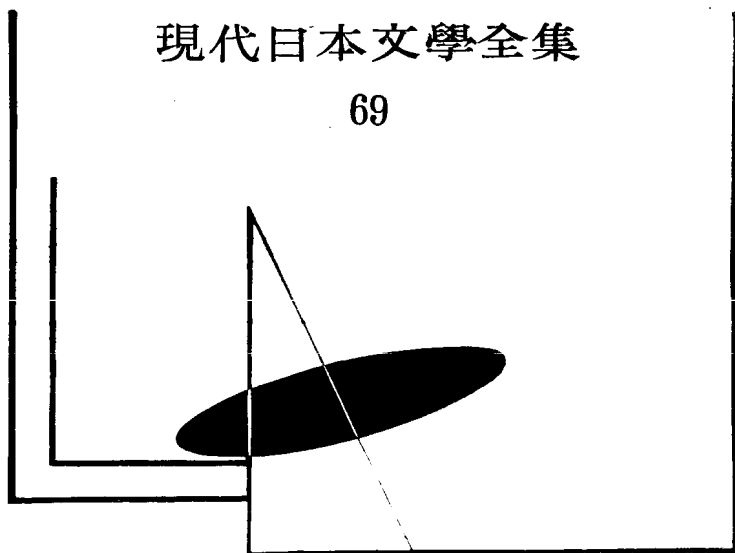
現代日本文學全集



水彦吉玄
牧赤憲利
山木村下
若島中木
集

現代日本文學全集

69



筑 摩 書 房 版

水彦吉玄集
牧赤憲利
山木村下
若島中木

昭和三十三年六月一日 印刷
昭和三十三年六月五日 發行

著者

若山 牧水
山木 赤彦
中村 憲吉
木村 利玄

發行者

古田 晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者

山田 一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

發行所

筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29) 七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製版 印刷
株式會社 株式會社
鈴木製本所 鈴木製本所

若山牧水集 目次

別離……………五

路上……………四

死か藝術か……………五

溪谷集(抄)……………七

島木赤彦集 目次

馬鈴薯の花……………一七

切火……………一四

氷魚……………一六

中村憲吉集 目次

林泉集……………三三

しがらみ……………二五

輕雷集……………二六

山櫻の歌(抄)……………七

黒松(抄)……………五

みなかみ紀行……………二五

太虚集(抄)……………一七

柿蔭集(抄)……………二四

歌道小見……………三一

『氷魚』と『あらたま』……………三三

アララギ二十五年……………三七

木下利玄集 目次

銀	三三	みかんの木	三三
紅玉	三四	道	三六
一路	三五	短歌管見	三六

牧水論序説(土岐善麿)	三七
-------------	----

島木赤彦(齋藤茂吉)	三九
------------	----

中村憲吉論(高田浪吉)	四二
-------------	----

木下利玄論(五島 茂)	四七
-------------	----

解説	四三
年譜	四九

装幀 恩地孝四郎

若山牧水集

別離

自序

廿歳頃より詠んだ歌の中から一千首を抜き、一卷に輯めて『別離』と名づけ、今度出版することにした、昨日までの自己に潔く別れ去らうとするところに外ならぬ。

先に著した『獨り歌へる』の序文に私は、私の歌の一首一首は私の命のあゆみの一步一步であると書いておいた、また、一步あゆんでは小さな墓を一つ築いて來てゐる様なものであるとも書いておいた。それらの歌が背後につづいて居ることは現在の私にとつて、可憐しくもまた少なからぬ苦痛であり負債である、如何かしてそれらと絶縁したいといふ念願からそれを一まとめにして留めておかうとするのである。然うして全然過去から脱却して、自由な、解放せられた身になつて、今まで知らなかつた新たな自己に親しんで行き度いとおもふ。

また、昨年あたりで私の或る一期の生活は殆ど名残なく終りを告げて居る。そして丁度昨年は人生の半ばといふ廿五歳であつた。そ

れやこれや、この春この『別離』を出版しておくのは甚だ適當なことであると私は歎んで居る。

本書の装幀一切は石井柏亭氏を煩はした。寫眞は一昨年の初夏に撮つたものである、この一卷に收められた歌の時期の中間に位するものなので挿入しておいた。

歌の掲載の順序は歌の出來た時の順序に従うた。

左様なら、過ぎ行くものよ、これを期として我等はもう永久に逢ふまい。

明治四十三年四月六日

著者

上巻

自明治三十七年四月
至同四十一年三月

水の音に似て啼く鳥よ山ざくら松にまじれる
深山の晝を

なにとなきさびしさ覺え山ざくら花ちるかげ
に日を仰ぎ見る

山越えて空わたりゆく遠鳴の風ある日なりや
まざくら花

朝地震す空はかすかに嵐して一山白きやまざくらばな

行きつくせば浪青やかにうねりぬ山ざくらなど咲きそめし町

朝の室夢のちぎれの落ち散れるさまにちり入る山ざくらかな

阿蘇の街道大津の宿に別れつる役者の髪の間ざくら花

母戀しかかるゆふべのふるさとの櫻咲くらむ山の姿よ

父母よ神にも似たるこしかたに思ひ出ありや山ざくら花

春は來ぬ老いにし父の御ひとみに白ううつらむ山ざくら花

怨みあまり切らむと云ひしくろ髪に白踰躑すゆく春のひと

忍草雨しづかなりかかる夜はつれなき人をよく泣かせつる

山脈や水あさぎなるあけぼのの空をながる木の香かな

日向の國むら立つ山のひと山に住む母戀し秋
晴の日や

君が背戸や暗よりいでてほの白み月のなかな
花月見草

蟬や寝ものがたりの折り折りに涙もまじる
ふるさとの家

秋あさし海ゆく雲の夕照りに背戸の竹の葉う
す明りする

朝寒や萩に照る日をなつかしみ照らされに出
し黒かみのひと

別れ來て船にのぼれば旅人のひとりとなりぬ
はつ秋の海

秋風は木の間に流る一しきり桔梗色してやが
て暮るる雲

白桔梗君とあゆみし初秋の林の雲の静けさに
似て

思ひ出れば秋咲く木木の花に似てこころ香り
ぬ別れ來し日や

秋立ちぬわれを泣かせて泣き死なす石とつれ
なき人戀しけれ

この家は男ばかりの添寝ぞとさやさや風の樹
に鳴る夜なり

木の蔭や悲しさに吹く笛の音はさやるものな
し野にそらに行く

吾木香すすきかるかや秋くさのさびしききは
み君におくらむ

秋晴や空にはたえず遠白き雲の生れて風ある
日なり

秋の雲柿と櫟との樹樹の間にうかべるを見て
人も語らず

幹に倚り頬をよすればほのかにも頬に脈うつ
秋木立かな

机のうへ植木の鉢の黒土に萌えいづる芽あり
秋の夜の灯よ

秋の灯や壁にかかれる古帽子袴のさまも身に
しむ夜なり

富士よゆるせ今宵は何の故もなう涙はてなし
汝を仰ぎて

日が歩むかの弓形のを空の青ひとすぢのみ
ちのさびしさ

悲しさのあふるるままに秋のそら日のいろに
似る笛吹きいでむ

山ざくら花のつばみの花となる間のいのちの
戀もせしかな

淋しとや淋しきかぎりはてもなうあゆませた
まへ如何にとかせむ (人へかへし)

うらこひしさやかに戀とならぬまに別れて遠
きさままの人

ぬれ衣のなき名をひとにうたはれて美しう居
るうら寂しさよ

春たてば秋さる見ればものごとに驚きやまぬ
瞳の若さかな

町はづれきたなき溝の匂ひ出るたそがれ時を
みそさざい啼く

植木屋は無口のをとこ常磐樹の青き葉を刈る
春の雨の日

船なりき春の夜なりき瀬戸なりき旅の女と酌
みしさかづき

春の森青き幹ひくのこぎりの音と木の香と藪
うぐひすと

ただひとり小野の樹に倚り深みゆく春のゆふ
べをなつかしむかな

わだつみのそこひもわかぬわが胸のなやみ知
らむと啼くか春の鳥

ゆく春の月のひかりのさみどりの遠をさまよ
ふ悲しき聲よ

雲ふたつ合はむとしてはまた遠く分れて消え
ぬ春の青ぞら

眼とづればころしづかに音をたてぬ雲遠見
ゆる行く春のまど

鶯のふと啼きやめばひとしきり風わたるなり
青木が原を

椎の樹の暮れゆく蔭の古軒の柱より見ゆ遠山
を焼く

春來ては今年も咲きぬなといふ名ぞとも知
らぬ背戸の山の樹

町はづれ煙筒もるる青煙のにほひ迷へる春木
立かな

われはいま暮れなむとする雲を見る街は夕の
鐘しきりなり

淋しくばかなしき歌のおほからむ見まほしき
よと文かへし來ぬ

人どよむ春の街ゆきふとおもふふるさとの海
の鷗啼く聲

街の聲うしろに和むわれらいま潮さす河の春
の夜を見る

春の夜や誰ぞまだ寝ぬ厨なる甕に水さす音の
しめやかに

春の夜の月のあはきに厨の戸誰が開けすてし
灯のながれたる

日は寂し萬樹の落葉はらはらに空の沈黙をう
ちそそれども

見よ秋の日のもと木草ひそまりていま滴落の
黄を浴びむとす

鎌をあげまた鎌おろしこつこつと秋の地を堀
る農人どもよ

うすみどりうすき羽根着るささ蟲の身がまへ
すあはれ鳴きいづらむ

うつろなる秋のあめつち白日のうつろの光ひ
たあふれつつ

秋眞晝青きひかりにただよへる木立がくれの
家に雲見る

落日や街の塔の上金色に光れど鐘はなほ鳴り
いでず

啼きもせぬ白羽の鳥よ河口は赤う濁りて時雨
晴れし日

さらばとてさと見合せし額髪のかげなる瞳え
は忘れめや (二首秀麿との別れに)

別れてしそのたまゆらよ虚なる双のわが眼に
うつる秋の日

いま眠ちむ寂しき瞳明らかに君は何をかうつ
したりけむ (途中大阪にかれは遊きぬ)

短かりし君がいのちのなかに見ゆきはまり知
らぬ清きさびしさ

窓かき秋の樹の間に遠白き雲の見え來て寂
しき日なり

酒の香の戀しき日なり常磐樹に秋のひかりを
うち眺めつつ

見てあれば一葉先づ落ちまた落ちぬ何おもふ
とや夕日の大樹

をちこちに亂れて汽笛鳴りかはすあ都會よ
見よ今日もまた暮れぬ

海の聲斷えむとしてはまた起る地に人は生れ
また人を生む

人といふものあり海の眞書なる底にくぐりて
魚をとりて食む

山茶花は咲きぬこぼれぬ逢ふを欲りまたほり
もせず日經ぬ月經ぬ

遠山の峰の上にきゆるゆく春の落日のごと戀
ひ死にも得ば

秋の夜やこよひは君の薄化粧さびしきほどに
靜かなるかな

世のつねのよもやまがたり何にさは涙さしぐ
む灯のかげの人

君去にてももの小本のちらばれるうへにしづ
けき秋の灯よ

いと遠き笛を聴くがにうなだれて秋の灯のま
へものをこそおもへ

相見ればあらぬかたのみうちまもり涙たたへ
しひとの瞳よ

君は知らじ君の馴寄るを忘むごときはかなご
ころのうらさびしさを

落葉焚くあをきけむりはほそほと木の間に
縫ひて夕空へ行く

靜けさや君が裁縫の手をとめて菊見るさまを
ふと思ふとき

相見ねば見む日をおもひ相見ては見ぬ日を思
ふさびしきころ

ふとしては君を避けつつただ一人泣くがうれ
しき日もまじるかな

黄に匂ふ悲しきかぎり思ひ倦じ對へる山の秋
の日のいろ

一葉だに揺れず大樹はタぐれのわが泣く窓に
押しせまり立つ

旅ゆきてうたへる歌をつぎにまゐめたり、思ひ
出にたよりよかれとて

山の雨しばしば軒の椎の樹にふりきてながき
夜の灯かな (百草山にて)

立川の驛の古茶屋さくら樹の紅葉のかげに見
おくりし子よ

旅人は伏目にすぐる町はづれ白壁ぞひに咲く
芙蓉かな (日野にて)

家につづく有明白き菅原に露さはなれや鶉し
ば啼く

あぶら灯やすすき野はしる雨汽車にはほけし
顔の十あまりかな

戸をくれば朝寝の人の黒かみに霧ながれよる
松なかの家 (三首御嶽にて)

霧ふるや細目にあけし障子よりほの白き秋の
世の見ゆるかな

霧白ししと落とる竹の葉の露ひねもすや
月となりにけり

野の坂の春の木立の葉がぐれに古き宿見ゆ武
藏の青梅

なつかしき春の山かな山すそをわれは旅びと
君おもひ行く (五首高尾山にて)

思ひあまり宿の戸押せば和やかに春の山見ゆ
うち泣かるかな

地ふめど草鞋聲なし山ざくら咲きなむとする
山の靜けさ

山静けし峰の上にのこる春の日の夕かけ淡し
あはれ水の聲

春の夜の匂へる闇のをちこちによこたはるな
り木の芽ふく山

汽車過ぎし小野の停車場春の夜を老いし驛夫
のたたずめるあり

日のひかり水のひかりのいろいろに濁れるゆふ
べ大利根わたる

大河よ無限に走れ秋の日の照る國ばらを海に
入るなかれ

松の實や楓の花や仁和寺の夏なほわかし山ほ
ととぎす (京都にて)

けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴しつ
つあくがれて行く (九首中國を巡りて)

海見ても雲あふぎてもあはれわがおもひはか
へる同じ樹蔭に

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ國ぞ
今日も旅ゆく

峽縫ひてわが汽車走る梅雨晴の雲さはなれや
吉備の山

青海はにほひぬ宮の古ばしら丹なるが淡う影
うつすとき (宮島にて)

はつ夏の山のなかななるふる寺の古塔のもとに
立てる旅びと (山口の瑠璃光寺にて)

桃柑子芭蕉の實賣る磯街の露店の油煙青海に
ゆく (下の關にて)

あをあとと月無き夜を満ちきたりまたひきて
ゆく大海の潮 (日本海を見て)

旅ゆけば腫瘦するかゆきずりの女みながら美
からぬはなし

安藝の國越えて長門にまたこえて豊の國ゆき
杜鵑聴く (二首耶馬溪にて)

ただ戀しうらみ怒りは影もなし暮れて旅籠の
欄に倚るとき

白つゆか玉かとも見よわたの原青きうへゆき
人戀ふる身を (二十三首日向を巡りて)

潮光る南の夏の海走り日を仰げども愁ひ消や
らず

わが涙いま自由なれや雲は照り潮ひかれる帆
柱のかけ

檳榔樹の古樹を想へその葉陰海見て石に似る
男をも (日向の青島より入へ)

山上や目路のかぎりのをちこちの河光るなり
落日の國 (日向大隅の界にて)

椰子の實を拾ひつ秋の海黒きなぎさに立ちて
日にかざし見る (三首都井岬にて)

あはれあれかすかに聲す拾ひつる椰子のうつ
ろの流れ實吹けば

日向の國都井の岬の青潮に入りゆく端に獨り
海見る

黄昏の河を渡るや乗合の牛等鳴き出ぬ黃の山
の雲

酔ひ痴れて酒袋如すわがむくろ砂に落ち散り
青海を見る

船はてて上れる國は満天の星くづのなかに山
匂ひ立つ (日向の油津にて)

山麓ゆ海よこたはるその間に狹しま白し夏の
砂原

遊君の紅き袖ふり手をかざしをとこ待つらむ
港早や來よ

南國の港のほこり遊君の美なるを見よと帆は
さんざめく

大うねり風にさからひ青うゆくそのいただき
の白玉の波

大隅の海を走るや乗合の少女が髪をよく匂ふ
かな

船酔のうら若き母の胸に倚り海をよろこぶや
よんどり兒よ

落日や白く光りて飛魚のとぶ聲しげし秋風の
海

港口夜の山そびゆわが船のちひさなるかな
沖さして行く

帆柱ぞ寂然としてそらをさす風死せし白晝の
海の青さよ

かたかたとかたき音して秋更けし沖の青なみ
帆のしたにうつ

風ひたと落ちて眞鐵の青空ゆ星ふりそめぬつ
かれし海に

山かげの闇に吸はれてわが船はみなとに入り
ぬ汽笛長う鳴る

夕さればいつしか雲は降り來て峯に寝るなり
日向高千穂

秋の蟬うちみだれ鳴く夕山の樹蔭に立てば雲
のゆく見ゆ

樹間がくれば見居れば阿蘇の青烟はかすかにき
えぬ秋の遠空 (以下七首阿蘇にて)

山鳴に馴れては月の白き夜をやすらに眠る肥
の國人よ

ひれ伏して地の底とはき火を見ると人の五つ
が赤かりし面

麓野の國にすまへる萬人を軒に立たせて阿蘇
荒るるかな

風さやさや裾野の秋の樹にたちぬ阿蘇の月夜
のその大ききや

むらむらと中ぞら掩ふ阿蘇山のけむりのなか
の黄なる秋の日

秋のそらうらぶれ雲は霧のごと阿蘇につどひ
て風ぎぬる日なり

海の上の空に風吹き陸の上の山に雲居り日は
帆のうへに (六首周防灘にて)

やや赤む暮雲を遠き陸の上にながめて秋の海
馳するかな

落日のひかり海去り帆をも去りぬ死せしか風
はまた眉に來ず

夕雲のひろさいくばくわだつみの黒きを掩ひ
日を包み然ゆ

雲は燃え日は落つ船の旅びとの代赭の面のそ
の沈黙よ

水に棲み夜光る蟲は青やかにひかりぬ秋の海
匂ふかな

津の國は酒の國なり三夜二夜飲みて更なる
旅つづけなむ

杯を口にくめば千すちみな髪も匂ふか身
はからるかに

白雲のかからぬはなし津の國の古塔に望む初
秋の山 (四天王寺に登りて)

山行けば青の本草に日は照れり何に悲しむわ
がころぞも (箕面山にて)

泣眞似の上手なりける小女のさすがなりけり
忘られもせず

浪華女に戀すまじいぞ旅人よただ見て通れそ
のながしめを

われ車に友は柱に一語二語酔語かはして別れ
去りにけり (大阪に罷水と別る)

酔うて入り酔うて浪華を出でて行く旅びとに
降る初秋の雨

昨日飲みけふ飲み酒に死にもせで白痴笑ひし
つつなは旅路ゆく

住吉は青のはちす葉白の砂秋たちそむる松風
の聲

秋雨の葛城越えて白雲のただよふもとの紀の
國を見る

火事の火の光り宿して夜の雲は赤う明りつ空
流れゆく (二首和歌山にて)

町の火事雨雲おほき夜の空にみだれて鷺の啼
きかはすかな (紀の國青岸にて)

ちんちろり男ばかりの酒の夜をあれちんちろ
り囁きいづるかな

紀の川は海に入るとて千本の松のなかゆくそ
の瑠璃の水

麓には潮ぞさしひく紀三井寺木の間の塔に青
し古鐘

一の札所第二の札所紀の國の番の御寺をいざ
巡りにむ

粉河寺遍路の衆のうち鳴らす鉦鉦きこゆ秋の
樹の間に

鉦鉦のなかにたたずみ旅びとのわれもをろが
む秋の大寺

旅人よ地に臥せ空ゆあふれては秋山河にいま
流れ来る (葛城山にて)

鐘おほき古りし町かな折しもあれ旅籠に着き
しその黄昏に (二首奈良にて)

鐘斷えず麓におこる嫩草の山にわれ立ち白晝
の雲見る

雲やゆくわが地やうごく秋眞晝鉦も鳴らざる
古寺にして (二首法隆寺にて)

秋眞晝ふるき御寺にわれ一人立ちぬあゆみぬ
何のにほひぞ

みだれ降る大ぞらの星そのもとの山また山の
闇を汽車行く (伊賀を越ゆ)

映出でて汽車海に添ふ初秋の月のひかりのや
や青き海 (駿河を過ぐ)

草ふかき富士の裾野をゆく汽車のその食堂の
朝の葡萄酒

晩夏の光しづめる東京を先づ停車場に見たる
寂しさ

——旅の歌をはり——

舌つづみうてばあめつちゆるぎ出づをかしや
瞳はや酔ひしかも

ところとと琥珀の清水津の國の銘酒白鶴瓶あ
ふれ出づ

灯ともせばむしろみどりに見ゆる水酒と申す
を君斷えず酌ぐ

くるくると天地めぐるよき顔も白の瓶子も酔
ひ舞へる身も

酔とりの玉のやうなる小むすめをかかへて舞
はむ青だたみかな

女ども手うちはやして泣上戸泣上戸とぞわれ
をめぐれる

こは笑止八重山さくら幾人の女のなかに酔ひ泣く男

あな可愛ゆわれより早く酔ひはてて手枕のまま彼女ねむるなり

睡れるをこのまま盗みわだつみに帆あげてやがて泣く顔を見む

酔ひはててはただ小をんなの帯に咲く緋の大輪の花のみが見ゆ

酔ひはてては世に憎きもの一も無しほとほとわれもまたありやなし

ああ酔ひぬ月が嬰子生む子守唄うたひくれずやこの膝にねむ

君が唄ふ『十三ななつ』君はいつそれになるかや嬰子うむかやよ

渴きはて咽喉は灰めく酔ざめに前髪の子がむく林檎かな

酒の毒しびれわたりしはらわたにあなこちよや沁む秋の風

石ころを蹴り蹴りありく秋の街落日黄なり酔醒めの眼に

もの見れば焼かむとぞおもふもの見れば消なむとぞ思ふ弱き性かな

黒かみはややみどりにも見ゆるかな灯にそがひ泣く秋の夜のひと

立ちもせばやがて地にひく黒髪を白もとゆひに結びあげもせで

君泣くか相むかひゐて言もなき春の灯かげのみの静けさに

かりそめに病めばただちに死をおもふはかなごちのうれしき夕(四首病床にて)

死ぬ死なぬおもひ迫る日われと身にはじめて知りしわが命かな

日の御神水のごとく冷えはてて空に朽ちむ日また生れ來む

夙く窓押し暈月のそらのうす青を見せよ看護婦胸せまり來ぬ

女ありき、われと共に安房の渚に渡りぬ、われその傍らにありて夜も晝も断えず歌ふ、明治四十年早春。

戀ふる子等かなしき旅に出づる日の船をかこみて海鳥の啼く

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の國を旅ゆく

春や白晝日はうららかに額にさす涙ながして海あふぐ子の

岡を越え眞白き春の海邊のみちをはしれりふたつの人車

海哀し山またかなし酔ひ痴れし戀のひとみにあめつちもなし

海死せりいづくともなき遠き音の空にうごきて更けし春の日

ああ接吻海そのままだに日は行かず鳥翔ひながら死せ果てよいま

接吻くるわれらがまへにあをあをと海ながれたり神よいづこに

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を君

いつとなうわが肩の上にひとの手のかかれるがあり春の海見ゆ

聲あげてわれ泣く海の濃みどりの底に聲ゆけつれなき耳に

わだつみの白晝のうしほの濃みどりに額うち
ひたし君戀ひ泣かむ

忍びかに白鳥啼けりあまりにも風ぎはてし海
を怨ずるがごと

君笑めば海はにほへり春の日の八百潮どもは
うちひそみつ

わがころろ海に吸はれぬ海すひぬそのたたか
ひに瞳は燃ゆるかな

ころろまよふ照る日の海へ中ぞらへうれひね
むれる君が乳の邊へ

眼をとちつ君樹によりて海を聴くその遠き音
になにのひそむや

砂濱の丘をくだりて松間ゆくひとのうしろを
見て涙しぬ

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ
海にとられむ

君かりにかのわだつみに思はれて言ひよられ
なばいかにしたまふ

涙もつ腫つぷらに見はりつつ君かなしきをな
は語るかな

君さらに笑みてものいふ御頬の上にながる
涙そのままにして

このごろの寂しきひとに強ひむとて葡萄の酒
をもとめ來にけり

松透きて海見ゆる窓のまひる日にやすらに睡
る人の髪吸ふ

闇冷えぬいやがうへにも砂冷えぬ渚に臥して
黒き海聴く

闇の夜の浪うちぎはの明るきにうづくまりゐ
て蒼海を見る

空の日に浸みかも響く青青と海鳴るあはれ青
き海鳴る

海を見て世にみなし兒のわが性は涙わりなし
ほはゑみて泣く

白鳥は哀しからずや空の青海のあそにも染ま
ずただよふ

夜半の海はよく知るや魂一つここに生きゐ
て汝が聲を聴く

かなしげに星は降るなり戀ふる子等こよひは
じめて添寝しにける

ものおほく言はずあちゆきこちらゆきふたり
は哀し貝をひろへる

渚ちかく白鳥群れて啼ける日の君がかほより
寂しきはなし

浪の寄る眞黒き巖にひとり居て春のゆふべの
暮れゆくを見る

夕海に鳥啼く闇のかなしきにわれら手とりぬ
あはれまた啼く

鳥行けりしづかに白き羽のしてゆふべ明るき
海のあなたへ

夕やみの磯に火を焚く海にまよふかなしみど
もよいざよりて來よ

春の海ほのかにふるふ額伏せて泣く夜のさま
の誰が髪に似む

ことあらば消なむとやうにわが前にひたすら
われをうかがふ君よ

君はいまわが思ふままよろこびぬ泣きぬあは
れや生くとしもなし

君よ汝が若き生命は眼をとちてかなしう睡る
わが掌に

わがまへに海よこたはり日に光るこのかなし
みの何にをのく

海岸の松青き村はうらがなし君にすすめむ葡
萄酒の無し

わがうたふかなしき歌やきこえけむゆふべ渚
に君も出で来ぬ

くちづけの終りしあとのよこ顔にうちむかふ
晝の寂しかりけり

いかなれば戀のはじめに斯くばかり寂しきこ
とをおもひたまへる

伏目して君は海見る夕闇のうす青の香に髪
のぬれずや

日は海に落ちゆく君よいかなれば斯くは悲し
きいざや禰らむ

白晝さびし木の間に海の光る見て眞白き君が
額のうれひよ

「木の香にや」「いな海ならむ樹間がくれかす
かに浪の寄る音きこゆる」

幾千の白羽みだれぬあさ風にみどりの海へ日
の大ぞらへ

いづくにか少女泣くらむその眸のうれひ湛へ
て春の海風ぐ

海なつかし君等みどりのこのそこにとともに來
ずやといふに似て風ぐ

直吸ひに日の光吸ひてまひる日の海の青燃ゆ
われ巖にあり

海の聲そらにまよへり春の日のその聲のなか
に白鳥の浮く

海あをし青一しづく日の瞳に點じて春のそら
匂はせむ

春のそら白鳥まへり嚙紅しつゝいばみてみよ海
のみどりを

燐枝すりぬ海のなぎさに倦み光る晝の日のも
と青き魚焼く

春の河うす黄に濁り音もなう潮満つる海の朝
風に入る

暴風雨あとの磯に日は冴ゆなにもに驚かさ
れて犬長う鳴く

白晝の海古びし青き糸のごとたえだえ響く寂
しき胸に

月つひに吸はれぬ曉の蒼穹の青きに海の音と
はく鳴る

手をととりてわれらは立てり春の日のみどりの
海の無限の岸に

春の海のみどりうるみぬあめつちに君が髪
の香満ちわたる見ゆ

御ひとみは海にむかへり相むかふわれは夢か
も御ひとみを見る

白き鳥ちからなげにも春の日の海をかけれり
君よ何おもふ

眞晝時青海死にぬ巖かげにちさき貝あり妻と
あさり行く

夕ぐれの海の愁ひのしたたりに浸されて瞳は
遠き沖見る

蒼ざめし額にせまるわだつみのみどりの針に
似たる匂ひよ

海明り天にえ行かず陸に來ず闇のそこひに青
うふるへり

ふと袖に見いでし人の落髪を唇にあてつつ朝
の海見る